彫刻シンポジウムにおけるコラボレーションによる公共空間デザインに関する考察

The Public Space Design as Collaboration Work in a Sculpture Symposium

八木健太郎* 竹田直樹**
Kentaro YAGI, Naoki TAKEDA

摘要：本研究は、公共空間をコラボレーションによってデザインする場合における、意志決定のプロセスを明らかにすることを目的とする。そのためのケーススタディとして彫刻シンポジウムをとりあげる。純粋に形態への関心をもっている彫刻家によるコラボレーションにおけるデザインの意志決定プロセスを分析することは、ランドスケープアーキテクトや建築家、アーティストらによるコラボレーションをする際の、効果的なデザインプロセスを考える上で、参考になると考えられる。

分析の結果、有効なコラボレーション形態として二つの主要なタイプが導き出され、今後公共空間をデザインする上で重要な示唆を得ることができた。

1. 研究の背景と目的

前稿¹⁾では、アートと建築・都市における公共空間との関係性について、その空間をデザインするプロセスにおけるアーティストと建築家のコラボレーションに着目して分析と考察を行った。この研究では、コラボレーション形態の違いがその成果にどのような影響を与えるのかという点を解明したが、コラボレーションを通して形態が決定される意志決定の具体的なプロセスについては未解明であり、今後の課題となっていた。

そこで本研究は、公共空間をコラボレーションによってデザインする場合における、意志決定のプロセスの一端を明らかにすることを目的とする。

そのためのケーススタディとして、彫刻シンポジウムをとりあげる。彫刻シンポジウムとは、複数の彫刻家が特定の場所において一定期間集まり、個人の作品あるいは共同制作の作品を公開の場で制作するものである。野外で制作されるために石が素材になることが多い。特に、共同制作による場合は、作品の規模が大きくなり、作品自体が空間的な広がりをもって制作され、その作品の置かれる場所の地形などコンテキストも含めた造形がなされることが多い。これらは単に公共空間に設置される彫刻作品という位置づけに留まらず、設置される場所全体の美的な価値の向上を目指している点において、ランドスケープデザインとしての性質も持ち合わせている。このことから、彫刻シンポジウムにおける共同制作による意志決定プロセスを対象とする研究は、ランドスケープアーキテクトや建築家、あるいはそれらとアーティストのコラボレーション²⁾を行う際に、効果的な意志決定プロセスを生み出す上で、有用な資料になると考えられる。

そもそも彫刻シンポジウムや、アーティストや建築家のコラボレーションを対象とした研究は少ない。彫刻シンポジウムに関する研究としては、日本における彫刻シンポジウムを概観した後藤らの研究³⁾や、山本による初期の彫刻シンポジウムの歴史と共同制作の思想に関する研究⁴⁾がある。コラボレーションに関しては、Dunnらの研究⁵⁾のように、地域住民の参加を求める形態のパブリックアート（すなわちアーティストと地域住民とのコラボレーションとなる）や、アーティストと建築家とのコラボレーションを扱った研究はあるが、本研究が対象とするコラボレーションによる意志決定のプロセスは、未開拓の領域である。

2. 研究の対象と方法

(1) 研究の対象

本研究は、2001年10月10日から27日にかけて兵庫県神崎郡神崎町で行われた「西播磨国際彫刻シンポジウム in 神崎」を分析対象とする。その理由は次のとおりである。

①このシンポジウムは、10人の彫刻家が参加し、2人ずつ5組のペアがそれぞれの作品を共同で制作する形をとっている。したがって、コラボレーションの形態としては最も単純かつ純粋な形態であり、コラボレーションの最小単位としての性質をもっていること。

②5組のペアに与えられた条件が極めて類似しているために比較検討が容易であること。

③作品制作は予め設定された公共空間を対象とし、設置場所の状況と応答しあいながら対象となる空間全体の質の向上を目指して制作される一定の空間的広がりをもつ作品として、ランドスケープデザインとしての側面も持っていること。

④コラボレーションの参加者が純粋に形態への関心を形にできる彫刻家であることから、コラボレーションにおける意志決定プロセスがより純粋に抽出できること。

以上のような理由から、この彫刻シンポジウムにおける共同制作を調査、分析することは、本研究の目的を達成するために適切だと考えられる。

(2) 研究の方法

本研究では、シンポジウムに参加した彫刻家（以下、制作者とする）に対するヒアリングによって、その意志決定のプロセスを明らかにすることを試みた。ヒアリングの実施日は次のとおりである。

①制作者が初めてお互いに介し、プランの作成を開始した10月5日。

②それぞれのペアがプランを一般に公開して制作を開始した10月10日。

③制作中の10月14日と18日。

④作品完成日の24日。

毎回、各制作者に対して個別にヒアリングを行い、コラボレーションに対する姿勢や、作品形態に関する意志決定のプロセスと実際の作品制作の進捗状況を把握した。

*神戸大学大学院自然科学研究科 **姫路工業大学自然・環境科学研究所／兵庫県立淡路景観園芸学校

最後に、シンポジウムが終了し、設置完了後の28日に設置場所の現地調査を行った。

以上の調査で得られたデータをもとに、各ペアのコラボレーション形態を分析し、その意志決定プロセスを考察する。

3. 「西播磨国際彫刻シンポジウム in 神崎」について

(1) シンポジウムの概要

西播磨彫刻シンポジウムは、1985年から毎年西播磨地域で行われている彫刻シンポジウムであり、今年で15回目を数える。当初は兵庫県立西播磨文化会館を会場に行われていたが、近年は西播磨地域の各郡が持ち回りの形で毎年若干形式を変えながら継続されている。今年は神崎郡5町（神崎町、大河内町、市川町、福崎町、香寺町）内の公共空間を完成作品の最終的な設置場所として選定し、原則的に各町内産の石を素材として提供を受け、シンポジウムは神崎町の「神崎いこいの村グリーンエコー笠形」を会場として開催された。

今回のシンポジウムは、国内だけでなく、海外の制作者も招待する国際シンポジウムとなった。地元の彫刻家の牛尾啓三が総合プロデューサーである。牛尾の選択により、国内から5名、海外から5名の計10名の制作者が招待された。国内の制作者は、神崎郡在住の2名に加え、新潟県、茨城県、岡山県から招待され、海外の制作者はカナダ、ドイツ、オランダ、アイスランド、イスラエルから招待された。制作者のペアリングは牛尾が行い、国内と海外の制作者を組み合わせで5組のペアが作られた。

シンポジウムの公式日程は、2001年10月10日から10月27日までであるが、アーティストは10月5日に全員が対面し、プロデューサーから説明を受けた後、10月10日のオープニングセレモニーにおけるラフプランのプレゼンテーションに向けた共同作業が開始された。今回のシンポジウムの特徴は、制作者が一对一で共同制作を行う点のほか、制作者が時間を完全に共有する点にある。全期間中を通じて全制作者が敷地内の施設に宿泊し、大部屋で共同生活を続けた。したがって、制作者たちは一日を通じて対話することが可能であった。

10月10日に各町からの代表者を招待してオープニングセレモニーが開かれ、コラボレーションの最初の成果として、ドローイングによるラフプランのプレゼンテーションが行われた。セレモニーに引き続き、各ペアでそれぞれ制作が開始された。制作状況は、一般に公開され、多数の見学者が訪れた。全ての作品は10月24日に完成し、10月25日に5か所の設置場所に設置され、10月27日にそれぞれの場所で序幕が行われ、シンポジウムは終了した。

(2) 共同制作採用の意義

彫刻シンポジウムにおける共同制作は、日本やヨーロッパで1970年代に盛んに試みられたが、1981年以降は、ほとんど実施されていない。この原因は、70年代の彫刻シンポジウムが、5人程度の制作者により1つの作品を制作するタイプが多く、参加者の意思の統合に失敗するケースが多かったためだと推測される⁶⁾。これらの共同制作は、公共空間における作品の性質に着目したものであった。公共空間には多数の彫刻作品が設置されているが、しばしば制作者の個人的な主張が空間の公共性と相容れないという問題が生じる。そこで、公共空間の形成に寄与する作品のあり方として、個人の個性を超えることを目標に、共同制作による作品に共通するひとつの特徴であるアノニマスな造形を目指したのである。こうした共同制作の意図は、現在もおおむね失うものではない。そこで、このシンポジウムでは、総合プロデューサーの牛尾により、2名による共同制作が提案された。

したがって、この共同制作は、きわめて実験的な性質をもつものといえる。また、ここでのコラボレーションは、異なる創造

性の共同の結果として現れる形態という点に加え、公共空間のデザインにおける新しい造形言語を作り出そうとする点においても、検討する意義がある。

4. コラボレーションの分析

(1) 分析の方法

ヒアリングは毎回10人の制作者に対して個別に実施したが、ヒアリング実施日とヒアリングの内容は次のとおりである。

①制作者が初めてお互いに介し、プランの作成を開始した10月5日。

ー理想のコラボレーション形態について。

②それぞれのペアがプランを一般に公開して制作を開始した10月10日。

ーラフプランの合意に至る形態決定プロセスについて。

③制作中の10月14日と18日。

ー実際の制作の中でどのように形態を決定しているのか。

④作品完成日の24日。

ー完成作品の形態決定プロセスについて。

まず、1)の結果に基づき、理想のコラボレーション形態に関する意識を分析する。次に2)の結果に基づき、ラフプランの完成に至るまでの意志決定プロセスを分析する。ここでは、ラフプラン作成時におけるコラボレーションのタイプを分類し、次に、それぞれのタイプごとにその特徴を分析する。その後、3)4)の結果に基づき、制作開始後の意志決定プロセスを分析する。ここでは、作品制作時におけるコラボレーションのタイプを分類し、次に、それぞれのタイプごとにその特徴を分析する。

そして、最終的にコラボレーション全体をとらえ、タイプを分類し、成果としての作品形態との関係性について分析する。

(2) 理想のコラボレーション形態についての意識

各ペアが作品に関する討論を始める前の段階で、理想のコラボレーション形態とはどのようなものかを各制作者にヒアリングした。

すべてのペアについて共通していることは、日本人制作者は比較的具体的な形態のイメージを持っていること、それに対して、外国人制作者は比較的概念的・抽象的なイメージを持っていることであった。

このヒアリングから抽出できた制作者にとっての理想的なコラボレーション形態のタイプとして、次の3つの方向性があった。

①テーマを共有し、別々の作品を作る。

②テーマを共有し、別々に作ったパーツを持ち寄って一つの作品を形成する。

③テーマを共有し、一つの作品を共同で作る。

作品を制作する上で「テーマを共有する」という点についてはすべての制作者に共通していたが、具体的な共同制作の進め方や作品形態のイメージに対しては各制作者によって、その具体性に関して差があった。

(3) ラフプランの完成に至るまでの意志決定プロセス

次に、オープニングにおいて発表されたラフプラン（図1～5）について、形態決定のプロセスについて各制作者にヒアリングした。AからEまでの各ペアについて個別に整理する。

(i) 各ペアの状況

・ペアA

このペアは、コンセプトの調整をはかりつつ、ドローイングを交えながら、実際に素材となる石を動かして討論を重ねた。コラボレーション形態として、タイプ2を主張する側と、タイプ3を主張する側で対立が起きたが、最終的に全体として一つの作品となるように、共同で作業を行うタイプ3で合意した。ただし、各パーツごとにどちらか一方が中心的な役割を果たすことになり、

タイプ2と3の中間的な位置づけとなった。全体の形としては、「モニュメンタルな形」と「平面的な形」を主張した双方の意見を折衷した形となった。(図1)

・ペアB

このペアは、敷地の条件から2人が別々の作品を作ることは無意味であると合意し、タイプ3の形態を目指すことになった。形態の決定に際しては、ジャズのセッションのようにドローイングを交換しながら進め、会話、ボディランゲージに加え、粘土模型による検討も行った。

形態的には1人の作家が提示した「平面的な形」に呼応して、「虹のような形」が出され、全体として一つの形が形成された。(図2)

それぞれの提案した形に対して双方が関わる予定であり、共同で作業していくことが基本となった。

・ペアC

このペアは、一緒に素材となる石を見ながら話し合いをしつつ、1枚のドローイングに2人で書き加えながら形を決定していった。2人共同で一つの作品を作る可能性についても話し合われたが、合意せず、双方が共通のテーマに基づいて制作し、2つのパーツを合わせて1つの作品にする形態(タイプ2)をとることで合意した。

テーマは「川に集う」ということで合意に達し、1人が「川」を表現し、もう1人が「集まる人々」を表現することとなった。(図3) ドローイングで示されているそれぞれのパーツの形態は、お互いの影響は受けていない。しかし実際の制作において影響を与え合う予定となった。

・ペアD

このペアは、多様なコラボレーション形態の可能性について話し合った後、2人で1つのものを作ることで合意した。(タイプ3)

設置場所の性質をふまえたテーマが設定され、形態的にもモニュメンタルなものは避ける方向で合意した。

形態の決定過程は、2人が同時にドローイングを描き、お互いにチェックしながら進めた。最終的なドローイングはそれまでの蓄積をもとに一人が描いたものであるが、その形はお互いに合意したものである。(図4) このペアは、地元産の石が提供されなかったため、イメージに合った素材を二人で選びに行ったという点で、素材から出発したほかのペアとは異なっている。

・ペアE

このペアは、設置場所が世界的に有名な「おもちゃ博物館」がある町内であることから、玩具を共通のテーマとすることで一致した。話し合いの結果、「2人の間には、わかりあえないことがあることを認めよう」という点で一致し、2人で別々の作品を作り、それを設置場所で合わせることで合意した。それぞれが複数のパーツからなる作品であり、タイプ2の性質も持っているが、一つの作品とする意識は希薄であり、むしろタイプ1の性質をより強く持ち合わせている。

形態については、それぞれがアイディアを出し、ドローイングを持ち寄って話し合った。別々の作品を作ることになったが、お互いの作品の形については意見を交換した。しかし、それぞれの作品はそれほど相手の影響を受けたものではなく、むしろ設置場所の形態をふまえたものである。発表されたドローイングも個別に作成されている。(図5)

(ii) タイプ分類

すべてのペアは、コラボレーション形態の理想像に関するヒアリングの結果に沿う形で、テーマを共有してラフプランを制作した。これはコラボレーションというテーマを消化する上で、最低限の合意事項だといえる。しかし、実際の作品形態としては、1)

LA FESTA MARTIN

まったり 萩野 孝一

図-1 ペアAラフブランドローイング

IMAGINARY LANDSCAPE
A HAZARD "BONIC" LANDSCAPE TO ENTER
A UNIFICATION COMPOSED OF VARIATIONS
KANZAKI HOSPITAL OCT 2001

図-2 ペアBラフブランドローイング

図-3 ペアCラフブランドローイング

PASSAGE — 明日へ —

図-4 ペアDラフブランドローイング

図-5 ペアEラフブランドローイング

個別の作品を作るタイプ（ベアE）、2）個別の作品を合わせて1つの作品とするタイプ（ベアC）から、3）共同で一つの作品を作ろうとするタイプ（ベアA、B、D）と広がりを持つ。この点についても全体としては前述の理想像に関するヒアリング結果と同様であるが、各制作者が前に述べた理想像と、話し合いの結果として決定されたコラボレーション形態とは、必ずしも一致していない。

形の決定に至るプロセスとしては、一部の例外を除いて言語的な問題もあることから、ドローイングを交換する形が最も広く用いられた。このプロセスにおいても、各ベアによって、お互いの形態が影響を与え合う度合いに強弱が見られる。また、ドローイングに加え、多様なコミュニケーション手段をとることができたベアの方が、共同で制作・作業する部分が多くなる、より高度なコラボレーション形態を目指している傾向がある。

（4）制作開始後の意志決定プロセス

各ベアは、オープニングにおいて発表したドローイングのラフプランに基づき作業を進めることになるのであるが、あくまでもラフプランであることから、作品の完成に向けて多くの形態的要素を決定していく必要がある。ここでは、実際に制作を開始した後の意志決定プロセスを分析する。

（i）各ベアの状況

・ベアA

作品を構成する全てのパーツに2人の手が入れられた。1人が形のアウトラインを作り、もう1人が磨いたり穴をあけたりして仕上げていく。自分がメインでないパーツでは、パートナーのアシスタント的な作業も行うことになった。その結果、全体としてはそれぞれの制作者の過去の作品の形を合わせたようなものになっている。基本的な構成はラフプランに沿って作業が進められたが、作業が進むにしたがって調整が必要になり、またお互いが交互に同じパーツに対して手を加えていくので、最終的に全体がどのような形になるのかはどちらにもわからない状態であった。お互いの信頼関係が醸成されるにしたがい、パートナーの考えをある程度予測して作業できるようにはなったが、同時にパートナーの作品としての質を破壊する不安もあった。個別的にはそれぞれの制作者のディテールへのこだわりが強くで、反対に全体の形態としては自由度を猶予したものになっている。結果として、完成した作品はどちらの作品とも違った新しい個性を持った作品に仕上がっている。（写真1）

・ベアB

ラフプランにしたがって2人でディテールを詰めながら修正が加えられた。当初合意した共通のテーマにしたがって全体のコンポジションや仕上げのディテールについて話し合いながら作業が進められた。全体の形としては、「平面的な形」と「虹のような形」はそれぞれの制作者が提案した形であり、提案した方の制作者がより深く関わったものである。しかし、いずれに対しても2人の手が入っており、その意味で個人の形と言い切ることはできない。それぞれの制作者に関して、それぞれが提案した形は、これまでの作品との類似性が見いだせるものの、2人の形が全体に混じり合ったものになっている。

とはいえ、「虹のような形」はかなり純粋に提案者の形に近いものであるということが出来る。また、「虹のような形」の提案者は、「平面的な形」についても作業工程の関係から仕上げを担当し、作品全体のテイストに関して実質的な決定権を握ることになった。さらに、「平面的な形」の各パーツのコンポジションについても指導力を発揮しており、「虹のような形」の提案者がプロジェクト全体を統率する形となり、「平面的な形」の提案者はむしろアシスタント的な役割を果たすことになったと言える。

・ベアC

作品の制作は、当初のプランに沿ってお互い別々に進められた。双方がそれぞれのパーツに手を入れることはなかった。話し合いの中心は、お互いのパーツの位置関係や配置に関するものであり、形態そのものについては、純粋にそれぞれの形が表現されている。しかし、表現の仕方やコンセプトについても意見交換しており、技術を教え合うこともあった。形態以上にコンセプト面でのコラボレーションが強く意識された。

とはいえ、この作品は対の作品であり、双方がお互いに見える位置に置かれることを想定している。また、設置場所をふまえて作品を構成するパーツの数が増やされた。追加されたパーツも1人で制作されたものだが、パートナーの姿をモチーフにしたものであることから、その意味では形態的に2人をつなぐものになっているという見方もできる。（写真3）

・ベアD

基本的にラフプランに沿って作業が進められた。作品の全部位について2人でドローイングを交えて話し合った。言葉の問題があるため、複雑な共同作業は困難であり、また、そのような共同作業の中でラフプランを大きく変更することはできなかった。その結果、最初のプランにしたがって、2人が別々にひたすら作業するという形になった。1人が波紋の輪郭をつくり、もう1人が仕上げるというように、2人で完成させた部位もあったが、それは形を作る上での話し合いの結果と言うよりは、作業工程上の都合であったといえる。また、各部位の表面仕上げには制作者の技術の違いが現れているが、全体としてはどちらのものとも言えない形に仕上がっている。大きな部位の素材は地元産の石ではないが、船をモチーフとする部位については地元の川から2人で探してきた石を素材にすることとして、作品と地域とのつながりを表現している。（写真4）

・ベアE

最初のプランから大きく変わることなく、作品の制作は別々に進められ、双方がそれぞれのパーツに手を入れることはほとんどなかった。物理的に1人では不可能な作業を手伝うケースや、技術的な交流があった程度であり、それぞれの形を作っていた。当初は2人で1つの形を作るのは無理だという姿勢で始まり、ほとんど形態上の影響もなかったのであるが、次第にジャズのセッションのようにお互いの形態に影響を及ぼし合うようになった。ただ、あくまでも自分のパーツは自分で制作し、パートナーの手が入ることはなかった。ラフプランの段階で、作品の配置について何も決めていなかったため、現地で意見を交換した結果、それぞれのパーツに作られていた「人の顔」をモチーフにした部位を活用して2人のパーツに関連性を創出することになった。（写真5）

（ii）タイプ分類

すべてのベアに共通することは、作品の制作開始後もプランそのものに大きな変更はなく、当初発表されたラフプランに沿って細かな修正を加えながら制作が進められたことである。そこで、ここでは意志決定をとらなう作業の進め方に着目して分類を行う。

作業の進め方としては、1）別々に作業するタイプ（C、E）と、2）共同で作業を進めるタイプ（A、B、D）の2つに大きく分けられる。

別々に作業するベアの場合、相手の影響を完全に否定はできないが、基本的に自分のパーツはパートナーに相談することなく自分で形態を決定し、作業を進めていった。ただし、この場合には全体の配置計画についてはお互いに話し合いがなされ、全体のバランスの中でそれぞれの作品が制作されていた。ラフプランの段階では、それぞれの形を組み合わせる1つの作品を作るベアCと、テーマの共有のみを行いそれぞれの作品を作るとしたベアEの間

で、コラボレーションに対する意識の違いが大きく感じられたが、実際に制作を始めてからは、全体の配置を見据えた中で、自らの形態に修正を加えつつ別々に作業をするという点で、非常に近い状態に収束した。

一方、共同で作業を進めるペアについてはバリエーションが大きい。BおよびDのペアの場合は、合意したラフプランに基づき、プランの微調整とディテールの検討を行った。したがって、常に全体の最終的な完成形態のイメージを共有しながら共同作業が進捗した。しかし、ペアAの場合は他の2組と大きく異なっている。作業の進行とともに2人でコンセプトを深め、さらにそのコンセプトの自分なりの理解に基づいて各パーツに交互に手を加えていく作業形態であったため、最終的な完成形態についてどちらの制作者も予測不可能であった。

(5) コラボレーションのタイプ

以上の分析に基づき、コラボレーション全体をとらえ、それを大きく分類すれば、第1に、それぞれ別々の形態を共通のテーマのもとで組み合わせて1つの空間を作るタイプと、第2に、共同で練り上げた形で空間を作るタイプの2つに分類できる。

前者は、全体のテーマの共有や配置計画を通して一つのコラボレーションワークとするものであり、個人の主張の現れとしての作品形態は双方に大きな影響を与えることのないタイプである。今回のシンポジウムでは、ペアCとペアEがこれにあたる。いずれも最初のプラン作成の段階から共同で1つの形を作ることは挑まなかった。その意味では消極的なコラボレーションであるといえる。しかし、お互いの関係性は感じられるものであり、最後までテーマを共有してプロジェクトを終了することができた点、ならびに、それぞれの作家が造形面での妥協を避けることができた点に関してコラボレーションは成功であったといえ、一つのあり方を示したといえる。

それに対し、後者は空間を構成する各部位の形態や配置を決定するのは個人の意志ではなくパートナーとの合意の結果である。したがって、完成した空間形態が特定の個人の主張する形態であると考えすることは困難である。今回、これにあてはまるのはA、B、Dの各ペアである。ペアAの場合、作業している制作者自身が最終的な完成形態を予測できないほどに、個人レベルの創造性を越えた新しい個性を持った形態が生まれた。その意味では積極的なコラボレーション形態であると言えるが、造形的な質の面では危険をはらんでいることも事実である。ペアBの場合、1人が指導力を発揮することで、双方の妥協の結果としてのコラボレーションとはならなかった。その結果として、特にコンテキストとコンポジションについて完成度の高いものに仕上がったのではないだろうか。しかし、それはパートナーの献身的な働きと、創造性を犠牲にした役割があって可能になったものであることも注目する必要がある。ペアDの場合には、当初のプランを忠実に再現すべく制作が進められた。それは、双方の合意に基づく形態を完成に導いた点で高度なコラボレーションであったといえる。しかし一方で2人の制作者はプランを合意に導くために、またそのプランを忠実に実現するために、創造的な面で妥協を積み重ねることになった。

このように見ると「共同で練り上げた形で空間を作るタイプ」に属しているペアのコラボレーションは、それぞれ微妙に異なる性質をもつものであることがわかる。すなわち、1) 比較的平等な立場で、双方が創造性をぶつけ合いながら新しい形を求めたペアA。ただしこれには新しい形の創造ではなくお互いの形の破壊に終わる危険性が常にあった。2) 一方が指導的な役割を果たし、その結果パートナーの創造性がある程度犠牲になりながらも新しい形を求めたペアB。そして3) 比較的平等な立場で双方が創造性を犠牲にしながら妥協点を探り新しい形を求めたペアDである。

写真-1 ペアA作品設置後の空間

写真-2 ペアB作品設置後の空間

写真-3 ペアC作品設置後の空間

写真-4 ペアD作品設置後の空間

写真-5 ペアE作品設置後の空間

これらの各ペアの作品をアイデンティティの所在と造形的な妥協度に関するマトリックスで示すと次のように整理できる。(表1)

表－1 形態上のアイデンティティの所在と妥協度

		造形原理における妥協度		
		低い	←	高い
		C,E	該当なし	該当なし
アイデンティティ	個人個人の形			
	統合された形	A	B	D

5. 考察

これまでの分析をふまえ、今後、公共空間を計画する際に参考となるであろうコラボレーションについて考察する。

(1) コラボレーションにおける留意点

コラボレーションにおいて留意しなければならないポイントは、第1に、参加するデザイナーやアーティストがテーマを共有することが最低限の条件になることである。また、テーマを共有することによって、実際の作業におけるコラボレーション形態にある程度自由度を確保することができる。第2に、コラボレーションの場合には、最初に合意したプランに対し、その後の作業の中で大きな変更を加えることが困難になりやすいということがあげられる。コラボレーションにおいては、当初のコンセプトやプランを練り上げる段階での話し合いがきわめて重要であり、その段階における合意形成のプロセスがコラボレーション全体の成否を決定づけると言ってもよい。

(2) 公共空間のデザインにおけるコラボレーションの可能性

本研究は、彫刻家同士のコラボレーションを分析対象としたが、公共空間をデザインする際には、ランドスケープアーキテクトや建築家同士で、あるいはそれらとアーティストがコラボレーションを行うことになる。本研究で提示したコラボレーションの2タイプのうち、それぞれ別々の形態を共通のテーマのもとで組み合わせるタイプについては、今回の彫刻家同士というように、同種のアーティストやデザイナーの場合には、共通のテーマを的確に設定することにより、よい成果を生み出すことができるかもしれない。しかし異種間の場合は、共通のテーマの設定だけではそのような成果に結びつかないケースが多いと予想される。なぜならデザインの対象が異なる中で、共通のテーマを共有するだけでは相互の関係性が十分には深まらないと予想できるからである。こ

の場合、共通のテーマ以外に様々なデザインコードの共有が必要になるにちがいない。

一方、共同で練り上げた形で空間を作るタイプは、公共空間をデザインする際、異種のアーティストやデザイナーが参加することにより、さらなる可能性の拡大をもたらすと予想される。このタイプのコラボレーションは、同種間よりむしろ異種間に適した性質を持つと考えられるからである。なぜなら、共同で一つの形を練り上げる作業において、異種の参加者であれば、それぞれが異なるデザインの対象を持つがために役割を分担しやすいと予想できるからである。この部分は、公共空間にふさわしい、個人のエゴイズムを超越し、且つ高水準でアノニマスなデザインを生み出す可能性を秘めた非常に興味深い部分といえる。しかし、同時に、常にコラボレーションには、創造性に関わる妥協や、相互に長所を消しあうことへの危険性が内在されていることを忘れてはならない。こうした問題を避けるためには、多くの実験的な試みが必要になると考えられる。こうした視点からも、本研究が対象にした今回のシンポジウムは、重要な実験としての意味を持つものであったと言える。

今日、多様なコラボレーションによるデザインが行われているが、今後コラボレーションの結果として完成した空間を評価し、効果的なコラボレーションワークを生み出すことのできるクリティカルポイントを見つけ出す必要がある。この点については、今後の研究課題としたい。

謝辞

まず、作品制作中にも関わらず、快く筆者らの調査にご協力いただいた彫刻家の五十嵐晴夫、荻野弘一、鈴木典生、水田勢二、宮浦泰暢、Einer Mar Gudvardarson、Douglas Alan Hunter、Martin Kuhn、Yuri Matukin、Hans Reijndersの各氏に感謝します。皆さんのアーティストとしての深い思索は、本研究の範囲を超えて筆者らに忘れ得ぬ記憶と貴重な示唆を与えてくれました。今後の研究に生かしたいと思います。ありがとうございました。また、総合プロデューサーの牛尾啓三氏には、研究の機会を提供していただいただけでなく、調査時に特段の配慮と協力、指導を賜りました。感謝します。牛尾氏の最先端の表現を模索する熱意と姿勢は、筆者らの研究姿勢にも強い影響を与えるものでした。今回の試みは美術史や造園史全体の中で意義あるものと確信します。

補注および参考文献

1) 八木健太郎・竹田直樹 (2001): 2つのアートプロジェクトの比較検討による都市空間と美術作品の関係性に関する考察: ランドスケープ研究 64(5), 835-838

2) 空間演出の最前線 (1998): デザイナー、アーティストによるコラボレーション: SD9805, 鹿島出版会を始め、雑誌・書籍等でも重要な動きとして取り上げられている。

3) 後藤敏伸・松尾豊 (1993): 彫刻シンポジウムの歴史と到達点: 富山大学教育学部研究紀要 43, 13-22

4) 山本哲三 (1972): 小豆島, サンクト・マルガレーテン, そして彫刻シンポジウム: 大阪芸術彫塑年報 1, 19-23

5) Peter Dunn and Loraine Leeson (1997): The Aesthetics of Collaboration, Art Journal, Spring Issue, pp.26-37

6) 彫刻シンポジウムを支えた思想や手法については、竹田直樹 (2000): モニュメントとパブリックアートーⅢー彫刻シンポジウム再考: モニュメントプロデュース, 渡辺石整社モニュメント事業部 Vol.37, 144-149 を参照。

Summary : This paper analyzes the collaborative process to design public space, the decision making process based on the various design concerns of different designers and artists. We chose sculpture symposium as a case study, since the outcomes of the symposium are typically landscape architecture rather than sculptures placed in the public space and their concern is more simplified in the formal issues which describe decision making process more clearly. Although this analysis is based on the collaboration of sculptors, it helps to develop the desirable types of collaboration between landscape architects, architects, designers, and artists. In conclusion, two major types of collaboration were found to well function when different design intentions from different professions met. This implies the possible working process of public space design through collaboration of designers and artists from various background.